



Title	四つの”party” : Virginia Woolf の中期三小説における”moment”
Author(s)	瀬尾, 素子
Citation	Osaka Literary Review. 1975, 14, p. 55-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25642
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

四つの “party”

— Virginia Woolf の中期

三小説における “moment”

瀬 尾 素 子

I

Virginia Woolf は中期円熟期の作と言われる *Mrs. Dalloway*, *To the Lighthouse*, *The Waves* において、party を効果的に設定している。決して逆行することなく、容赦なく老いと死へと等間隔に運行する clock time にさらされつつ、それぞれに自我をもち、孤立し、互いに communication を欠き、個々に gulf を抱いて、時としては傷つけ合い、又時としては孤独に在るという苛酷な現実認識を基本に持っていた Woolf は、それ故にこそ常にその対極を求め続けていた。彼女は日記の中で

What I call “reality”... in which I shall rest and continue to exist. Reality I call it. And I fancy sometimes this is the most necessary thing to me: that which I seek.⁽¹⁾

と書いているが、彼女の求め続けたものを “reality” と考えるなら、clock time の支配する苛酷な現実の中に否応なしに在りながら、絶えず対極である “reality” を志向するというのが彼女の基本姿勢であった。彼女は、生きてある限り、いかに苛酷であろうとも現実と直面せざるを得ず逃げることは出来ないという認識のもとに、生の中に momentary “reality” として彼女が独特の意味で用いる “moment” を経験し得ると考えていた。そして、party は現実の中に momentary “reality” としての “moment” を得る一つの重要な場として、Woolf の現実認識と “reality” への求めという基本姿勢に深くかかわってくるのである。ここでは四つの party 即ち *Mrs. Dalloway* における Clarissa の party, *To the Lighthouse* にお

四つの“party”——Virginia Woolf の中期三小説における“moment”

ける Mrs. Ramsay の dinner party, *The Waves* における Percival の送別 party と Hampton Court での party をとりあげてこの問題を考察してゆきたい。これらの party は、そのすべりだしにおいては Woolf の考えている現実認識の延長として、個々バラバラでよそよそしい人々の単なる寄り集まりでしかない。そこに Woolf は核となる人物を設定する。そしてその人物は、自らの存在、努力、そしていくつかの象徴的な小道具によって、集まっただけで個々に gulf を抱く人々の間に一体感をつくりあげ、いわゆる party における“moment”を形成するという型をとるのである。この様な clock time の支配する現実から“reality”への束の間ながら充実した移行である“moment”形成という同一の型とその展開を、以下四つの party について考察してゆきたい。

II

Mrs. Dalloway における party と *To the Lighthouse* における party は驚く程似通っている。いずれも女主人公が hostess をつとめるばかりでなく、彼女等は party に意味を見出し、人々を集め、そこにたとえ瞬間的であろうとも個々に孤立して在る人々同士の unity からなる充実した“moment”をつくり出そうと努力し、“moment”を得て満足感をもつのである。彼女等はいずれも一応恵まれた幸福な生活を送っている。結婚しており、夫に愛され、子供に恵まれている。二人共五十才をすぎ、時として鏡の前で clock time の刻む老いを感じつつも、いまだ美しさをとどめた婦人である。だが、その様な一応幸福な生活は、彼女等の心に必ずしも安定を与えているわけではない。

Clarissa Dalloway は下院議員夫人で、優雅で享乐的とも言える社交生活をおくっている。だが大病を患い五十才を過ぎた彼女は clock time の強制してくる老いと死の予感と、夫婦生活のわびしさをはらいきれない。子供を生んでなお virgin の image で語られる彼女にとって、夫との間は、たとえお互い同士が感謝や愛情や尊敬をそれぞれ個々には持っているとしても、夫婦間の一体感を共有し得ない、communication を喪失した夫婦なのである。そしてその様な夫婦生活のわびしさを転嫁出来るかも

しれない娘 Elizabeth との間も又じっくりいっていない。かつての恋人の来訪の際、娘を紹介する彼女は “Here is Elizabeth.” でいいところを “Here is my Elizabeth.” と強調して、相手に “Probably she does not get on with Elizabeth.” (p. 53) と悟られてしまう。又、再会したかつての恋人 Peter Walsh の激情に自らも誘われて、心の中で衝動的に「一緒に連れていって」と叫びつつ、次の瞬間には劇の観客の様に傍観者である自分を意識しているのである。この様に夫、娘、かつての恋人という彼女の最も親しい筈の者とすら結びつきを持たない彼女は、“I am alone forever.” (p. 53) と感じざるを得ない。彼女と他の人々の間には避け難い “gulf” (p. 132) が横たわっているのである。そしてその越え難い gulf を埋め、お互いの communication を回復し 一体感をつくりだそうとする試みが、彼女に party をひらかせるのである。

一方、Mrs. Ramsay は Clarissa の持ち得なかった成熟した女性の暖かさを持ち、人々から慕われ、人々のいらだちや寂しさを慰め、人々の間が円滑にいく様にたえず気を配り、又かなりそれに成功している。だが彼女をその様な態度にかりたてているのは “She felt alone in the presence of her antagonist, life.” (p. 124) という意識である。彼女は現実の life をこの様に考えざるを得ない。

She must admit that she felt this thing that she called life terrible, hostile, and quick to pounce on you if you gave it a chance. (pp.95-96)

彼女は夫を愛しながらも、次の様に思ってしまう。

It was painful to be reminded of the inadequacy of human relationships, that the most perfect was flawed, and could not bear the examination which, loving her husband, with her instinct for truth, she turned upon it. (p.66)

この様に二人の女主人公は、一応幸福な生活を送り人生を享受しつつも、その底に根ざすものは、老いと死へ等間隔で一方方向に進みゆく “strong, indifferent, inconsiderate” clock time と自らの “the dwindling of life”⁽⁴⁾ へのおびえ、そしてその中で個々に在るが故に互いの間に gulf を意識し

四つの “party”——Virginia Woolf の中期三小説における “moment”

互い同士 communication を喪失しているという現実認識なのである。そしてその様な現実からの一つの救いとして、彼女等が自ら試み構築してゆくのがこれらの party なのであり、その中で同じ様な経過をたどって彼女等は瞬間的に人々の間に unity をつくりあげ、充足感にあふれる “moment” を得てゆくのである。今日の一般的な感覚から言えば、物理的に人々を一堂に集めた party は、かえってその物理性故に群集の中の孤独を集まった人々に感じさせる方が多いと言えよう。だが Virginia Woolf が描く特にここでとりあげる party には、その様な性質をもつ単なる party というよりは、ritual 乃至は ceremony といった象徴的な意味あいが付加されている。Clarissa は “What’s the sense of your parties?” という Peter の問に答えて “They’re offering.” (p. 134) と述べている。又 Mrs. Ramsay の party の最中にも “victims . . . to the altar” (p. 157) “sacrifices” (p. 138) という言葉が用いられている。この様な意味において、Virginia Woolf の描く party は、一種の儀式として、人々を集め苛酷な現実の中に人々が互いに一体感を感じる “moment” を経験するという独特の型をとるのである。

各々の女主人公は、入念に party の準備を整え、円滑に運ぶ様にと心をくたく。だがはじめは、彼女等の努力にもかかわらず party はうまくすべり出さない。Clarissa は party を “complete failure” (p. 184) と感じていたらち、Mrs. Ramsay も同じ様に感じる。

They [*i.e.* the guests] all sat separate. And the whole of the effort of merging and flowing and creating rested on her. [*i.e.* Mrs. Ramsay] (pp. 130-131)

だが逆にいえば、この認識が強烈であればある程、次におこる現実から “moment” への転換はより強い印象を与え、より女主人公達を充たすのである。やがて同じ様な道具立てをきっかけとして、party は彼女等ののぞむ方向へすべり出す。それは *Mrs. Dalloway* では次の様に語られる。

The curtain with its flight of birds of Paradise blew out again. And Clarissa saw — she saw Ralph Lyon beat it back, and go on talking. So it wasn't a failure after all! it was going to be all right now — her party. (p. 187)

この設定は *To the Lighthouse* において、さらに明確な形をとる。

Now all the candles were lit, and the faces on both sides of the table were brought nearer by the candle light, and composed, as they had not been in the twilight, into a party round a table, for the night was now shut off by panes of glass....

Some change at once went through them all... they were all conscious of making a party together in a hollow, on an island; had their common cause against that fluidity out there. (pp. 151-152)

前者では、カーテンが外部を閉め出すことで一つの避難所的密室をつくりあげる。後者ではさらに説明的で、ろうそくの光が夜の闇の中に避難所的密室をつくりあげ、窓ガラスが闇を閉め出し、内部の人々はよりそって仲間意識を共有し、一体感を得る。それは、女主人公が認識した苛酷な現実即ち闇の消失ではない。単に闇に窓ガラスでフィルターをかけて束の間さえぎった瞬間的なものである。いずれ再び襲い来る闇を意識するが故に、現在の “moment” は一層価値を持つ。これこそが party を催すことによって彼女等が求め、そして得た “moment” である。人々は自我をぶつかりあわせることなく、身を寄せ合って互いの間に unity をつくり出した。女主人公達の求めは充たされ “moment” が得られた。それはまさに “a match burning in a crocus” の様な瞬間、the moment of “illumination”⁽⁵⁾ である。その瞬間 Clarissa と Mrs. Ramsay は、あこがれの対象としての海の住人となる。海を思わせる緑色のドレスを身にまとった Clarissa は人魚の image で描かれつつ “that intoxication of the moment” (p. 191) に身をたづぬかれる。一方 party が成功をおさめた満足感に酔う Mrs. Ramsay も水の image で語られる。

As one passes in diving now a weed, now a straw, now a bubble, she felt again, sinking deeper, as she had felt in the hall when the others were talking, There is something I want — something I have come to get. (p. 183)

四つの “party”——Virginia Woolf の中期三小説における “moment”

まさにその瞬間は Mrs. Ramsayにとって次の様なものであった。

They would, she thought, going on again, however long they lived, come back to this night... and to her too. It flattered her,... to think how, wound about in their hearts, however long they lived she would be woven. (p. 175)

だがこの様な “moment” は歓喜と充足の中にあくまでも瞬間、つまり束の間のものであるという性質を否認なく帯びている事を見落してはならない。先に述べた様に、闇からの解放ではなく、一時的な避難所としての性質である。party で達成された “moment” はそれを体験している一瞬間は求めの充足であり、美しく輝いている。人々は unity を共有し、clock time は閉め出されたかに見える勝利の瞬間である。だがそれは又 “moment” であるが故に、つまり束の間であるが故にあくまでも clock time の運行の中に組み込まれ、過ぎてゆかねばならないもろさを内包しなければならなかった。“moment” は現実からの解放ではなく、現実凝視の中に生まれ、それ故にこそ、つまり充実ともろさが表裏をなすが故に、一層貴重なきらめきとなるのである。Septimus の死を間に入れながらも Clarissa の party への回帰で幕を閉じる Mrs. Dalloway では、party の “moment” は束の間故に、よりそのきらめきを印象づける。さらに *To the Lighthouse* においては、party の場で終らずに Mrs. Ramsay の死も含めて clock time が暴威をふるう第二部を経て、彼女の思い出が再び残された人々を結ぶ第三部へと展開する。この party の後に来る展開と呼応して、Mrs. Ramsay の party の “moment” は、そのさなかに “This would remain.” (p. 163) と確信されつつも “vanishing even as she looked” (p. 173) という面も見過ごせないという両面を描かれることによって、より鮮やかに定着されるのである。

III

The Waves では人々が集まる party は二度設定されている。最初は六人の登場人物のあこがれの対象である Percival がインドへ行く際の送

別 party、二度目は Percival も死に六人がそれぞれ人生の坂を下り始める頃再会する Hampton Court での party である。この二つの party は微妙な差異を含みつつ、Clarissa や Mrs. Ramsay の party と同じ型、つまり互いに gulf を抱きつつ個々に在る人々が、一人の核となる人物によって集められ、そこで “moment” が得られるという型を踏襲している。そして *The Waves* において二つの party の核となる人物は Percival であろう。

幼年時代以来、それぞれ学校へそして各自の人生航路へと別れていった六人の登場人物がはじめて一堂に会するのが Percival の送別 party である。彼等は集まりはしたものはじめはそれぞれの考えのみを追って “darkness of solitude” (p. 88) の中にいる。だが Percival の出現は、この状態を一瞬にして変えてしまう。

He [*i.e.* Percival] is a hero.... We who yelped like jackals biting at each other's heels now assume the sober and confident air of soldiers in the presence of their captain. (p. 88)

彼の出現は集まった人々の間に unity を形成し、それは後の Hampton Court の party にもくり返される一本のカーネーションの image で象徴的に語られる。

There is a red carnation in that vase. A single flower as we sat here waiting, but now a seven-sided flower. (p. 91)

この “a seven-sided flower” は人々の和の形成、party で得られた “moment” を表わしている。この様に互いに一堂に集まっても jackal の様にはえたとていた六人が Percival の登場によって七人の和を形成するというのは Clarissa や Mrs. Ramsay の party を踏襲している。だが Percival は、Clarissa や Mrs. Ramsay の様に自らの意志で party を催そうと試みるわけではない。しかも彼は、実は直接小説内に登場することのついてない、六人の登場人物の独白によって間接的に語られるだけの実体のない人物である。さらにこの party は “moment” を求めて催されたものではなく、六人の偶像である Percival との別れの為のもの、人

四つの “party”——Virginia Woolf の中期三小説における “moment”

々を集めて和をつくるためではなく別れを告げるためのものなのである。Clarissa の party への回帰で終わった *Mrs. Dalloway*, *Mrs. Ramsay* の party に対する満足感で終る *To the Lighthouse* の第一部とちがって、*The Waves* におけるこの第一の party は Percival が去っていくところで終わっている。さらに party の中に Percival の死が暗示される。そして “Now Percival is gone.” (p. 105) という独白で party が結ばれることは、一応 party の型が踏襲されているにせよ、そこで得られた “moment” が過ぎゆく相を帯びてくることを端的に物語るのである。さらに party の後には clock time が Percival の死や六人の “dwindling of life” をもたらしつつ進行してゆく。充足ともろさが表裏をなしつつ、それ故に鮮やかに定着されてきた party の “moment” は、同じ型をとりながらも、その実、表裏のバランスを崩してもろさへと傾きはじめるのである。

Percival の送別 party の後、それぞれ別々の道を歩んだ六人は、今一度そして最後に Hamton Court で集まる。だがその時には彼等の偶像であり英雄であった Percival はすでに死んでいる。六人の登場人物はそれぞれ人生の下り坂にさしかかり、青春時代の夢は幻滅と挫折感にかわっている。だが再び集まった六人の上に、かつて彼等を結びつけた Percival の思い出がよみがえってくる。

But there was another glory once, when we watched for the door to open, and Percival came; when we flung ourselves unattached on the edge of a hard bench in a public room. (p. 152)

それをきっかけに、再び party の “moment” が得られる。

This moment of reconciliation, when we meet together united, this evening moment, with its wine and shaking leaves... (p. 155)

The fish, the veal cutlets, the wine have blunted the sharp tooth of egotism. Anxiety is at rest. (p. 159)

We six... for one moment... burnt there triumphant. The moment was all; the moment was enough. (p. 197)

四つの “party”——Virginia Woolf の中期三小説における “moment”

そしてそれは再びカーネーションの image で描かれる。

The flower ... the red carnation that stood in the vase on the table of the restaurant when we dined together with Percival, is become a six-sided flower; made of six lives. (p. 162)

しかし第一の party で核になる人物を Percival という間接的にしか語られない人物に設定した上に、第二の party ではその Percival 自身でさえなく彼の思い出が核とされるため、人々を集めて形成される “moment” はその充足と輝きよりは、一層そのもろさ、その過ぎゆく相へと傾いていく。“moment” は得られた。だがもはや場面はそこにはとどまらない。六人がそれぞれ別れてゆくところで Hampton Court の party は終る。その最後の 独白の中で、“moment” を形成した我々も party が終るとやがて去っていくという意味で Bernard が言う “We must go.” (p. 166) は *Mrs. Dalloway* において Septimus の死に衝撃を受けた Clarissa が party へ戻ろうとする “She must go back.” (p. 205) との対比によって、Clarissa の party と Hampton のそののあり様を端的に物語る。人々を一堂に物理的に集めて核となる人物がまとめあげる party の “moment” はあくまで東の間の避難所的なものであり、女主人公達のいささか自己満足的充足感でしかないという側面を *The Waves* は二つの party を、Percival を通してではなく核ではない六人を通して描くことにより示唆してしまったのである。苛酷な現実の中に瞬だがきらめく充実の “moment” を形成する場として、Woolf の現実認識の中での求めの姿勢を描く手法であった party は *Mrs. Dalloway* から *To the Lighthouse* を経て *The Waves* で二度もおこなわれながら、いずれもそこで終らずに過ぎゆく相で描かれたことや、核となる人物の間接化によって、そこで達成された “moment” は表裏をなす充足とはかなさのバランスをくずして、過ぎゆく相へと傾斜してゆく。それ故二つの party を経た *The Waves* の最終世界は、party では捕捉し得なかった、現実からの東の間ではなく完全な解放として死の様相を帯びざるを得なかったの

四つの“party”——Virginia Woolf の中期三小説における“moment”

である。

IV

以上Virginia Woolf の中期三作に特に効果的に設定された四つのpartyの考察により、Woolfが party を、彼女の認識する現実の中において瞬間的に互いの gulf が埋まり unity が形成される“moment”を得る場として描いたことを述べてきた。この様な party において得られた“moment”は、彼女が求めた“reality”の momentary な捕捉であり、束の間だが充足感を与える燃焼度の高いものであった。だがこの三小説において効果的に同じ型をとりつつ描かれた party とそこで得られた“moment”は各小説中に占めるその位置ともかかわりながら微妙に変化している。*Mrs. Dalloway*は、party たけなわの時、Clarissa が party へと回帰した確認である“Here she was.”で終わっている。*To the Lighthouse*では、Mrs. Ramsay の充足感で終る第一部は *Mrs. Dalloway* と同質であるが、その“moment”は“This would remain.”と感じられつつ“vanishing even as she looked”とも描かれてその両面が明確化され、後の展開とも呼応して、過ぎゆく相を帯びつつも鮮やかに定着されている。*The Waves* ではさらに核となる人物の間接化と、第一の party における“Now Percival is gone.”第二の party における“We must go.”に端的に語られる様に、party で得られた“moment”は、その充足としてより束の間のものとしての性質をより強く帯びてくる。Woolf の求めた“moment”は、その名の通り束の間という性質を否応なしに帯びている。だが、たとえもろいものであろうとも、彼女の認識する現実の中に生きてある限りは、“moment”は彼女の求めるものの最高の捕捉であった。そしてそのもろさが露呈された時には、彼女の求めの対象は、momentary でなく eternal な、現実からの解放として死へのめりこんでいかざるを得ず、*The Waves* の結末へと展開していった。“moment”の内包する、求めても求めても得たと思うと過ぎ去っていくという本質的なもろさが一つの限界か、死へのめりこむことが限界であるかは簡単には論じられないが、いずれにせよ、束の間のもので、生の中

四つの“party”——Virginia Woolf の中期三小説における“moment”

にきらめく瞬間としての“moment”を捕捉しようとした中期における Woolf の試みの鮮やかな定着とその展開が、この四つの party を通して見事に描かれている。そして、彼女は自らの認識する苛酷な現実を凝視しながらも生の中に踏みとどまり、もろさを内包しつつも、むしろそれ故にこそ充実したきらめく瞬間、不完全ながら生の中に得られる最高のものとして、party における“moment”を描ききったのである。

注

Mrs. Dalloway, To the Lighthouse, The Waves の引用はいずれも Hogarth Press の Uniform Edition によった。

- (1) *A Writer's Diary* (London: The Hogarth Press, 1969), p. 132.
- (2) *Mrs. Dalloway*, p. 53.
- (3) *Ibid.*, p. 66.
- (4) *Ibid.*, p. 40.
- (5) *Ibid.*, p. 36.